広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	【ビザンツ詩翻訳シリーズⅠ】 『エロトペグニア（二）』
Author(s)	土居，英樹；福田，耕佑
Citation	プロピレア , 30 : 73 - 91
Issue Date	2024-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055888
Right	Copyright (c) 2024 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	

翻訳

【ビザンツ詩翻訳シリーズⅠ】

『エロトペグニア（二）一』

土居　英樹　訳
大阪市立大学文学部世界史学教室

福田　耕佑　共訳
大阪大学大学院人文学研究科特任研究員（常勤）
日本学術振興会特別研究員（PD）

筆を置くか否か、私の心は熟考したのだから。　三三五

金髪の君は、類まれなる金髪、豊満なこめかみ、
白い大理石の如き首を持ち、水晶の如き白雪姫[二]、
あるいは愛を湛えたポルフュラ色[三]の縁の杯、
または金を吊り下げた燭台、飾り紐付きの帯[四]の如く
私はいつも君を身に付け、私の女主、君は私を締め上げる。　三四〇

如何に私たちが人々から引き離されるのか
愛が運命付け、裁き、解き明かしてくれるだろう。
もし君のために語ったことが見出されたなら、
私の女主、熱情の剣で私の四肢が、
舌と唇が、何よりもまず頭が切り落とされるだろう。　三四五
私の女主、君のために語らなかったことが
見出されたなら人々は恥じ、私たち二人はキスをするだろう。

柑橘の新芽、葡萄の木の実、
バラ水のじょうろ[五]、アレクサンドリアの麝香、
実をつけた……百合と李。
滴るマスティハで私は君の基を定めた。　三五〇

第四部

私は君に手紙を送る、私の目よ。私の魂よ、読んでくれ。
手紙を嫌わず、インクを貶さないでくれ、
多くの涙をもって手紙を書いた時、
手は紙を握り、もう片方の手は石筆を握り、

そして君を捕まえ、君にいつまでもキスしよう。

私は高貴なる女の指に指輪を見た。
黄金の記憶で編まれた、愛の巻かれた指輪を。
私はその指輪を眺め、人々はキスを求める。　三五五
少女よ、私にキスを与えてくれ。金髪の君、私の話を聞き入
―れてくれ、
死神となり私を連れて行ってくれ。私は思い煩いから解放さ
―れるだろう。

私はあなたの友愛の幼さ、熱情に誘惑されぬ様を見つめる。
私はキスを与えず、あなたは立ち去ることになるが、まだお
―高くとまっていられるか？

私の主人、あなたは遠ざかってしまう。神と聖者はあなた
―と共に　三六〇
あなたの道にバジルを、あなたの道にオトギリソウを。
あなたの髪を囲むように赤いバラ六を。
私の主人、あなたの行く所で、入った場所で
他の少女を見つけ、捕まえてキスをすることだろう。
キスしあう間、あなたはため息をつくだろう。　三六五

もし分別があればその少女は、あなたに何度も尋ねるだろう。
「どうしたのですか、私の主人、あなたは大きなため息なん
かついたりして？」
「私の女主、君には何も尋ねないようにと言っておいたのに
その後になって君は私に尋ねた。君にあのことを告白しよう。
私はロードス島で少女にキスをして、あの子を置き去りにし
―た七。　三七〇
彼女は小さな星と留まり、その光明と共に輝き、
女主、彼女は私を探し求め、尋ね回っている。
私のサヨナキドリは何をしているのだろう？私の鳥は何をし
ているだろうか？
あの良き鳥は何をしているのだろう？　あの子は私を覚えて
もいないだろうか？」
二度でも三度でもあなたに懇願しましょう。私の主人、
―三七五
私の良さを語り、私の妙齢を語ってください。
悪戯をしたから、こんな風には言ってくれないのですよね。
私は分別なく敷物を一面に広げ、分別なく眠り、
分別なく甘いキスをしました。あなたを愛する人が多くいた
―から。

誰が夜に歩み、夜明けに歩むのでしょうか？　三八〇
美しい私の小鳥、首が美しく羽に覆われた鳥、
私のまごころを誰が奪い去ったのでしょうか。
その時には地に埋まっていたいです。
私がこの世界に生き、姿を見せて歩く限り、
私たちの悲しい別れにため息をつくことでしょう。　三八五

あなたが通りかかる時、話しかけ、見も、挨拶もしてくれない。
貴婦人方と隣人たちは話しかけてくれるけど
私を忘れ、誰か別の女を見つめている。
もし、その女を愛し、私を見つめないというのなら、
その女の方が美しいというのなら、そうやって見つめていれ
―ばいい。　三九〇
私の方が美しいというのなら、その女の両目が飛び出すこと
―でしょう。

私が語っていたのは、君の愛が花開き、芽生え、
蝋燭の如く輝き、煌めき、光の如く広がったこと。
君の私に対する、優柔不断で優柔不断八な矛盾した愛を見て
キスで燃えた愛を見て、　三九五

君の髪が編み、編みこまれたなら九、
そのように君の愛は至る所でもつれることだろう。

私は彼を愛し、戦のさなか刺されてしまった彼を見ました。
たとえ彼が私を深く悲しませず、私を百度は見つめないとし
ても、
たとえ私を掴み取らず、穏やかに眠れないとしても。　四〇〇
彼は落ち着いてキスしてキスをし、私を悠々と抱擁し一〇、
彼はその腕を差し伸べ、私は下の方へ転がり落ちる。
私はその印の方に手を見つめ、彼は私を離そうとする。
私を突き離す前に間に合わせ、そのことを申し述べましょう。

「私の主人、聞いていないのですか、人が私に男を唆すの
を」　――四〇五
「もし君のもとにそいつが連れて来られるというなら、そい
―つを選び取るがいい。どうして君は私にそう言うのだろう。
私の母なる女性が私に女を連れてきてくれるというのに」
「もしあなたの愛がその女にあっても、私は悲しまないでし
ょう。
私の脇に、上に伸びた美しいあなたの枝を据え、
あなたは傍に立ち、その枝を見つめ、あなたの心は燃え、

私の心が燃えるように燃えています。
あなたは自分の腕を縛ってその傍に立ち、
友人たちは私たちを見つめ、あなたを非難するのです」
—四一〇

あなたは私の心を殺し、その心の血を注ぎました。
私に憐れみを与えてください、無情な人よ。
この争い、私たちの生の別れ、この不安は何なのでしょう？
あなたが入ってきて、小石の上に私を座らせ、
小突いたので私は倒れました。憎い人。あなたが何の役に立
—つというのですか？
あなたは石だけを引きずり、その音だけが鳴りました。
夢を抱いていたのは恥でした。
四一五 四二〇

純粋なる金の山羊よ[一]、無垢なるかかとよ[二]。
君が歩めば、私は見惚れ、天を仰ぐ。どうして君の道が香ら
—ないだろうか、
どうして山が香らないだろうか、どうして野原が花開かない
—だろうか！

私の主人、私はあなたに話さず、指図もしなかった
あなたは果樹園を作り……
扉と鍵を作り、鍵をかけてください。
私が果実で、皆が私を愛していることを、
旅人たちが私を欲し、病人たちが私を探し求めるのを、あな
—たは知らないのね。
四二五

そうしてまた若者がこのような言葉を言う。
「ああ！　私の愚かな心、まき散らされた心。
たおやかな人が私を愛し、彼女が私に懇願していたなら
私は彼女の手を取って帰り、今頃は彼女を抱いていたろうに。
私は心から信じていたのに、他の男が私から彼女を奪い
彼女を愛し、私も愛して彼女に干上がってしまった」
四三〇

豪奢に縫われ、刺繍の施された我が帽子よ
私の主があなたを捕まえる時、我が帽子よ、彼はあなたを投
—げるでしょう[三]。
身をかがめ、その美しい首に何度もキスしてください。
四三五

あなたは孤児で外国人の少女にキスをしました、
あなたにキスを十分与えたのに、今やあなたはどうやって彼
—女を拒むのでしょうか？

手紙と石筆のインクで書かず　四四〇
あなたは二つの言葉を私に書きましたが、それは小さな慰め
―だったのでしょうか？
彼は私にそのことを、甘い言葉でもって報せる。
「君が待つ時は彼も待ち、君が我慢する時は彼も我慢する。
手紙と石筆のインクを見つけるため
私の心の中から外へ、二つの言葉を君に書こう。　四四五
たおやかな人よ、君がそこから、小さな慰めを得るために」

お母さま、私はその若者を愛し、彼を良く知っています。
ヴェネツィアでは、ヴェネツィア人を、異国では、ジェノヴ
―ァ人を、
そして剣においてはトルコプロスを一四、一番槍ですから。

「私のはげ山の満月よ、贅沢の印よ　四五〇
コンドスタヴロスのジャスミン一五、来てください。私の主人、
―キスしましょう」
「行く機会が無いから、私が君を欲していることを信じては
―くれない。
もし来るよう私が手配したところで、君は私に腹を立てるこ
―とだろう」

瓶よ、どれほど私は欲しくて堪らないことだろう。とても
―愉快な君の美を。
君は水瓶で私は人。君は私のより良き幸福を握り　四五五
君はたおやかな人の唇に、冷たい水を引き入れるのだろう。

人も知り、あなたも自分でおわかりでしょうが、あなたは
―賢い人です。
頭を大きくかがめて、その目で私に目配せしてください。
私に聞こえるように、私の主人、あなたが私に挨拶したこと
―を。

私は叫び、世界を語り、全てを明らかにしよう。　四六〇
私の中で年月は竜の如く巡り
そして一週間は獣の如く、月日は獅子の子の如く
私のためであるかのように、日々はいつも悲惨。
私は愛を得るため、愛をその中では考えず
愛する彼を見つめ、彼がキスした他の女を見つめ、　四六五
そして見つめて、自分の喉を掻き切り、
私はあえて言葉を発さず、彼らは動じずに語り大いに笑う一六。

私の主人、実り多い人、赤い林檎を献ずる人。
私の目は常にあなたを見たがっているけれど
あなたの母が私を妨げるから、見つめることができず　四七〇
あなたはお世辞とその知恵で
網の中に私を捕まえ、私は飛べなくなった。
私があなたに抱くように、たとえあなたが私に熱情を抱いて
―いたとしても
食べないよう、飲まないよう、そして眠らないようにした、
あなたは小鳥が夜々に歌い一七、　四七五
歌うことを欲し、あなたは愛について全てを語り、
私の肋骨に扉があったとすれば、あなたは開けて見たでしょ
―うし、
私の心が悲しんでいる様を目にしていたことでしょう。
たとえあなたが信じなくとも、不信の人よ、たとえ知らなく
とも、
私からあなたへの熱情を取って、あなたが欲するところに与
―えればいい、　四八〇
私は異国の女や通りがかる女のように立って見ていてあげま
―しょう。

私に語りかけた君ではなく、人が私に書きつけたのは
「女主、もし君が私にキスを与えてくれるなら、君に天国を
―作ろう」ではなかったかい？
君は天国ではなく、不平を生み出した。
入っていって、私を愛の葉に座らせた。　四八五
いずれにせよ、私はあなたが敵にして裁判官だと知っている。
もし、優柔不断な人よ、君がキスをして、拒むことを私が知
―っていたなら、
私は太陽により焼け、その灼熱により焼けてしまったことだ
―ろう。

ああ！美しい女主よ、私に憐れみを与えてくれ
私は一人で駆け落ちしたり、君のため異国に移住したりはし
―ない一八、　四九〇
そして可憐な少女よ、君は私のため小さな魂を失う。
君は知っている、優雅な人よ、私が君に何を求めているのか
―を。
君の唇のためキスを、君と共にいよう。

私は年月を抱え、私の女主よ、私が君を愛することをあの
―二人に言ってくれ。

座っている時も立っている時も、いつも君を思い出すだろう、
君を引き寄せてキスをし、私の心は喜ぶだろう。
そして私が起きる時、君を見つけられず、それを悲しみ嘆く。
—四九五

金曜日、私は君を怖がった、女主よ。土曜日の間中ずっと。
君に懇願しよう、私への憐れみを、神が世界を与えるかのよ
—うに、
キリスト教徒たちは復活祭の日々を迎える。
このように私は君を敬おう。女主よ、私の正しい女王よ。
五〇〇

君は天のあらゆる星々によって光輝く。
女主よ、あらゆる君の隣人たちにより、君は優美だ一九。
なぜなら、君は色白で金髪、まるで月の如く見えるから。
私はキリストの恵みにかけて、君を変えることは決してない。
—五〇五

熱情から私は愛の労役者、愛の奴隷となった。
そして私の心中に熱情を乗せた。だが取るに足らぬことだ！
私の心の全てを焼き尽くす熱情を、
死の最後の衰弱が私を枯れさせ、
いつも私は悩まされる。私は日々を悲しみ
休息を持たず、もちろん大きな悲しみを抱える。
甘く焦がれる少女のため、その高貴な女のため。
五一〇

恋よ、恐ろしき専制者よ、黄金の翼をもつ者よ、
私は君の妙齢に震え、君の姿と
君の美しい翼を恐れている。私の首を斬るのではないかと。
—五一五

私の恋は私の右手に、私の愛は左手に腰掛ける。
弱さは私の膝に、怯えは私の手に、
食欲不振は私の口に、私は飛べなかった。

今、私の魂よ、彼女を拒んでくれ。痛みが君を通り過ぎ、
空虚にし、私はたびたび通り過ぎ……
そしてため息は、私の心よ、それらは私たちを今や寂しがっ
—ている。
たおやかな人は私たちが信じあっていると知っているのだか
—ら。
五二〇

「そして、君に何があったのか。邪念を持った人よ、

そして君が私を見た時、君は怒り狂い、私が君の扉を行きかう時、
君は瑞々しい魚(うお)の如く私の衣服を酷く裂き、私をそのように
―虐めるのか。　五二五
そして日々と時間がやって来て、私は君に報いよう」
その時また、たおやかな人が若者に言った。
「庭師が黄色の胡瓜と乾いた南瓜を
そして吐き気を催す甜瓜を投げました。
そのように、私もあなたの愛を捨て去ったのです」　五三〇
「私は持っている……神を。神が君を勇気づけ、
そして女主よ、君は私のため気が狂っているのだろう」

私が愛するところはどこでも悩まされ、私が熱望するとこ
―ろはどこでも悲しみに暮れ
視線を投げかけるところはどこでも、私には苦しみがある。
時間はあったが過ぎ去った。私の女主よ。彼らが君を愛して
―いた時、　五三五
私は心の中に、君に多くの最愛を抱えていた。
もし私の光を君が抱えるなら、人々は探し求め、私はこう言
―うだろう。
「そうそれだ。私は信じていた、君の愛が強固になることを。
そして君の身体は快楽に満ちている」

私の女主よ、君を愛していると言うのが恥ずかしい。　五四〇
女主よ、君も私を愛していると言うのに怖気づいている。
そしてそれは私と君の中で何をもたらすのか？
私にそう言ってくれ。もし私がそう言うのなら
私は君が言い訳をするのではないかと恐れている。
優雅なる人、少女よ、その承諾は離婚を禁ずる金印勅書[二〇]の
―ようだ。　五四五
というのも大勢がそれを信じ、私が君にキスし、
君を捕まえ、君に干上がると言っているから。
君はそれを望んでいる、そうしてくれ。君は私を全く苛みは
―しないだろう。

女主よ、彼らはいつでも君を愛しているが、私は君を一層
―愛そう。
もし君が信じていないなら、たおやかな人よ、もし知らない
―なら、　五五〇
彼らの恋、私の心の中に団栗を植えた、
燃え盛る心について尋ねてくれ。
君は私の心の内奥を踏みにじり切り刻む、

爪と肉かのように、そのように私は君と共にいる。
私の女主よ、君は川、黄金の蜜の流れる川だ。　五五五
そこには揺らぎと美と共に、多くの糸紡ぎがある。
行き交う者は皆それを飲み、決して喉を乾かさなかった。
そして女主よ、私が飲む時は決して君に満足しなかったから
私の女主よ、いつも私は喉が渇き、君を飲みたくて堪らない。
君は皇帝[二二]が凭れ、ロゴテティス[二三]が裁く宮殿に　五六〇
立っているポルフュラ色の柱だ。
女宰の聖像[二三]、皇帝の魔除け、
王[二四]の名誉、貴族の名声だ。
君は夜の露で、冬の露だ。
そして晩の光、昼の太陽　五六五
暁の明星、宮殿に吊り下げられた燭台だ。
君は天の星であり、平原の花であり、
多くの富をもった誰もが羨むような邦だ。
そして太陽の円環の中で、光は君の上にある。
アダムのあばらの中から取られた君はあばら骨だ[二五]。　五七〇
多くの心が燃え、火を放たれたところに君はいる。
さえずるサヨナキドリの中の、一羽の鳥だ。
私が眠りへと倒れ込むのなら、君を見つめよう。
恋は一層大いに私を苦しめる。

女主よ、君を思い出し、私の心中に君を投げ入れる時　五七五
私の小さな心が揺れ動き、葉のように震え、
心の奥からため息をつき、とどまれなくなってしまい
君の愛が私の心の外から入って来てから
まるで諸刃の剣が私の腸を切り裂くかのように
私のあらゆる思考と手足を食いつぶしていく。　五八〇

もし君が知っていたなら、たおやかな人よ、私が如何にため息をつき、
如何に目に毒薬を流させ、
如何に目が川の如く涙を流すのか、
そしてもし私の肢体を見たならば、
君が悲しんで私に手紙を書いた時、如何に飛び去っていった
―のかを。　五八五
私には魂があったが君が取って、心を引き抜いてしまった。
魂と心なしに、私は如何にこの世で生きればよいのだろうか。
君の愛は私を枯れさせ、君のキスが私を燃やし、
君の熱情の恋は私を死の中に投げやる。
私がそれを知っていて、それを望み、自分の心に投げ入れて
―いたとしても、　五九〇
それでも君は私を思い出すことも、心に私を置くこともせず

私が君に対するように、私を心から愛してもくれない。
私は行って、無慈悲な泉を探し求めただろうに、
心を濯ぎ洗い、愛が忘れられる無慈悲な泉を。

……人々は[二六]、夕方と夜、そしてあらゆる夜　五九五
……私は君を探し求めていた。

私の女主よ、私が君を愛するほどには、大地に植物はなく、
木々も果実もなく、オリーブの実もない。

聞いてくれ、愛で大いに苦しむ皆の者よ。
ある夜、ある宵に、私はたおやかな人にキスをした。
彼女の懐は麝香と共に大いに香り、　六〇〇
彼女の息の香りで私の胸は未だに香る。
そして甘いキスで、私の唇は今なお甘い。
そして今、私たちは別れた。ああ、私はどうなるのだろう。
今、私は病気になり裁かれ、死に瀕し倒れる、
君の名前を求め、魂を取り戻したい。　六〇五
君が人殺し、魂の送り人と呼ばれているように、
君の愛が魂を送ってしまったのだから。

私の女主よ、もし君の私を拒むと知っていたなら、
もし私が持っていたものさえ彼らが売り、私が葡萄の園を買っていたなら、
私は……だろう、喪に服し、　六一〇
私は決して黒い飾り紐を身に着けはしなかっただろう。

私の女主よ、君の腰掛ける高き窓、
私は狭いところを行き交い、君が私を見上げることはない[二七]。
そして、君が私を見ようと頭を下げた時、君は私の心に火を
―付けた。
君の唇にはキスがあり、君の目は愛らしく、　六一五
君の眉は私を喜ばせる、なぜなら弧を傾けているから。
私は、自分が折良く行くべき君の家を知らなかった。

私が愛する彼女はしなやかな枝で、美しき葦や
糸杉の如くしなやかな人で、キジバトの如く華奢だ。

第五部

女主、私は心からの愛を君に抱いていた。　六二〇

そして私たちが引き離されないようにという望みを抱き、
今、卑しい私は私たちの別れを見ている。

私はあなたを拒みたい、あなた二八、でも私にはできない。
なぜなら、私の主人、あなたのため息を知っているから。
主人よ、あなたは私のために、なじるようなため息をついている。 六二五

ご機嫌よう、私の女主。物語れ、君の心を私に置いて、
君のために恋はどれほどの打撃を私に叩きつけるのか。
そしてもし君が岩なら、耐えてくれ、砦よ、君は裏切るのか。
もし君がそれならば、私は大いに愛そう。私の望みのままや
―って来てくれ。

多くの打撃と恋の大きなため息、
私は多くの苦しみを君のために被った。 六三〇

来てくれ、金髪の人、優雅なる人、私の目の光。
二人は語らって、そして甘くキスして、
君の心が望む願いを君は満たす。

悪を祈る人々が私たちの愛をうらやみ
私たちの中に言葉を投げかけ、私たちを離れさせようとする。 六三五
彼らはあなたを引き離して、私に他の男を与えようとする。

貴婦人、女主。君が他の男を選び取り、
私の小さな魂が外へ出て、私が君との別れを
見ないようにと企てた時を、私はその日を欲していた。 六四〇

私は座り、立ち上がり、歩み、眠り、目覚め、
私の主人、私は食べる時も飲む時も、あなたを心にいつも抱
―えている。

あなたが悩まされないように、大きなため息をつかないよ
―うに、
若い人、あなたはそう望むけれど、そうはなりません。

私の目はそれを見て、知らされて、
女主、君の熱情の魅惑を、私はそれを手に入れる。 六四五

私はあなたの言葉を受け入れましょう、あなた二九、その真
―実にかけて。

あなたの心はそれを持っていて、あなたの唇がそれを言う。
私の思考は私に言う、あなたの望みに至るようにと。

美しい糸杉のような人、私を、異国の者を思いやってくれ。
―六五〇

私はそれに苦しみ、私に同情を寄せる人もいる、君ゆえに私
―は虐められる。
私が去るように行かせてはくれないが、君が間違っている。

若者よ、知らせの使者を知ってください。
私のために悲しんでいるあなたが幾年も過ごしたことを
そのような日々が過ぎ去ったことを、あなたが得たいと望む
―ことを。
六五五

君は三日月刀で打つ。たおやかな人、心の奥底で。
それゆえ君の唇はこの知らせを語る。
来てくれ、美しい人三〇、私は君に恩がある、来てくれ、君に
―それを与えよう！

あなたも同じでしょう、私の主人、心からの誓いをしてく
―ださい。

あなたが私の愛の中に下心をもっていないようにと。
六六〇

私は神に乞い願った、もう一度願おう。
もし私が君の愛の中に下心をもっているなら
活き活きと世界を歩き回らないようにと。

君の唇にキスをしよう、金髪の人。麝香が香る唇に
あらゆる美を私のために囀り語って
女主、私はいつもそれを聞きたいと望んでいる。
六六五

魂を、私は君の心を持っていて、私は天使を恐れず、
天使を見るだろう。その天使は君のように見えるだろう。
そして私は君の名前を言い、魂も抜けてしまうだろう。

第六部

私は上手く言ってやった、私のハヤブサ、私の名誉ある優
―雅な人、
六七〇

男たちの誇り、男らしい人々の装飾、
他の女はあなたを喜ばせず、あなたに善を手にさせない。

私以外は……卑しい異国の者で、
そこで私は日々、長い時を削いだ[三一]。
あなたは他の少女の愛に行ったり、翼を下ろしたりもせず
その女の口の香りから取ることもなく私を忘れもしない。　—六七五

私はどうなるのだろう。もしあなたが私からあなたへの熱
—情を
そして私とその隣人からあなたの友愛を取り出したなら？
もし醜聞が人々の言葉を投げかけたら、
主人よ、私はあなたの友愛を解き放ちはしない。　六八〇

サヨナキドリ、人は言う。もし悩まされるなら夜に歌わず
暁も昼も金切り声を上げず、
葉の生い茂る木に腰掛けもしない。
もし何度も歌うことを望み欲するなら、
悩まされながら暁に囀り、その声を隠し、
それを聞く者は皆、サヨナキドリが悲しんでいると言う。　六八五
それ故、愛する時はいつでも賢明で、
大いに我慢強く、大いに巧みであり、
好機に留まり、年月を耐え忍ぶ。

たとえそれ程の時間が行き交い、容易に過ぎ去るとしても
欲さずとも戦うことを望むようになる。　—六九〇

愛する人、はじめから終わりまで君が示すように、
はじめに徳を示し、その後で毒を示し、
心を無駄にまき散らし、心は呪われた。

ハトの如く歩む女、美貌をもったキジバトよ、
私は君を見て、君は沐浴し、浴場から出てきた[三二]。
その時から私は君を見て、私の心は血を滴らせ、
君に、その唇と口にキスをしたかった。　六九五

獄に繋げられた鳥よ、いつまで人は君を引き留め、
君を羨望する彼らが、いつまで君を享受するのだろう。　七〇〇
彼らが君を愛するところでも、さぁ、堂々と通ってくれ。

緑を身にまとう少女が窓に腰かけ、
その目はサファイアにも勝る飾りだ。
浅瀬の塔、海の橋があって
私はそこを渡って、紅い君の唇にキスをした。　七〇五

キジバト四羽が空を飛んでいる。
その時、彼らは高く飛んでいって低空を見つめ、
つがうべき相手を探し求めている。
そうして、愛する若者と一体となる。

来てくれ、私の露、君に与えて君に別れを告げよう、七二〇
フランギア三三へ行きたい。ひょっとすると、女主、手遅れか
もしれないが
君に誓った、君を忘れずに
君を拒まずに、他の女にキスをしないと。

君の美しい顔は、まるで……

一　本翻訳は同誌に投稿した『エロトペグニア（一）』（土居、福田訳（二〇二三））の続きである。Ἀγνωστος Συγγραφέας (1956), Ερωτοπάγνια, στο *Βυζαντινή Ποιήση*, Γεώργιος Ζώρας (επιμ.), Αετός -Βασική Βιβλιοθήκη, Αθήνα, σ. 254-270. の第四部から第六部まで、二六一頁から二七〇頁までを訳出した。必要に応じて Auteur inconu (1913), *Ερωτοπάγνια (Chansons d' amour)*, D. C. Hesseling et H, Pernot, (ed.), Librairie Universitaire, Paris.も参考にした。第六部の途中で原文は途切れているため、今回の訳出で本作品は完結する。なお当翻訳では、それぞれの部ごとに異なる男女二組が言葉を交わしているものと解釈して訳出している。また訳文中に「—」のある箇所が存在するが、その箇所は原文では一行で記載されているが本翻訳では一行に収まらず二行になっている箇所であり、本来は一行続きであることを明示するために「—」を入れている。

二　κρουσταλλοχιονάτη: 中世ギリシア口語詩の特徴である複合語による表現であり、ηχιονάτη が「白雪姫」や「雪の女性」と訳しうるものであるが、その前に水晶を意味する κρ(ο)ύσταλλο が複合されている。

三　πορφυρόν: 五六一行目でも用いられている。ポルフュラ色は一般的に緋紫色と表現される色のことであるが、実際に正確な色調を確定することは困難である。紫貝から僅かに抽出される高価な染料で染められた絹織物は、皇帝一族のみが着用を許され、また外交上の贈り物として用いられた。またコンスタンティノス五世以来、ポルフュラ色の岩で覆われた、あるいはポルフュラ色の絹織物がかけられた「緋産室」で生まれた皇族は「ポルフュロゲネトス」、すなわち「緋産室の生まれ」と呼ばれるようになり、皇帝一族の血統の権威を確立するのにも利用された。ゆえに特に五六一行目では宮殿の柱を形容しており、ビザンツ期を通じて皇帝一族の権威の象徴であると共に、高貴さの代名詞でもあったため、「ポルフュラ色」が使われていると考えられる（Herrin, J. (2008), *Byzantium: The Surprising Life of a Medieval Empire*, Princeton, 186; 佐伯綾那（二〇一六）、「アンナ・コムネナの描く「ポルフュロゲネトス」：一二世紀ビザンツ歴史書『アレクシオス一世伝』より」、大阪市立大学博士論文、一二-一八頁）。

四　後期ローマ帝国時代に官吏の服装に帯（ベルト）が着用されるようになって以来、民衆の間でも帯の着用が普及していった。ビザンツ期の修道士や輔祭は帯を純潔、節制、男らしさの象徴と見なしていた。帯は基本的に革製か布製で、尾錠（バックル）は青銅製だった。宮廷人の付けるものには紫色や金色のもの、宝石を散りばめたものもあった。帯の金具は主に帝国の辺境で、軍人のものだけではなく民衆のものも数多く発見されている。例えば一〇世紀から一一世紀に成立した『新バシレイオス伝』においても、著者グレゴリオスが

ノミスマ金貨二枚の価値があるという他人の帯を盗み、聖人に返すよう諭される場面が語られており、身装具としての帯の価値が分かる（Kazhdan, A. (1991), *Oxford Dictionary of Byzantium*, Oxford, 280; Sullivan, D. F., Talbot, A.-M. and McGrath, S. (2014), *The Life of Saint Basil the Younger: Critical Edition and Annotated Translation of the Moscow Version*, Washington, DC, 168-171, 172-173）。

五　κάννι: 例えばキプロス方言で脛や葦を表す語として見られる単語である。現在の共通ギリシア語では καν́ι 或いは複数形の καν́ια 形で「足（πόδι）」の意味で用いられる。マノリス・トリアンダフィリディスの『共通ギリシア語辞典』によれば καν́νί の形で「葦の石筆（κόνδυλις καλαμιού）」を意味する用例もある。

六　本翻訳ではカタカナの「バラ」と漢字の「薔薇」が登場するが、τριαντάφυλλον をカタカナ、ρόδον を漢字で表現している。

七　一八七九年に初めてこの『エロトペグニア』を校訂した W.ヴァグナーはこれに Das ABC der Liebe. Eine Sammlung rhodisher Liebeslieder zum ernsten Male herausgeben という題名を与えた。彼が題名に「ロードスの愛の歌（rhodischer Liebeslieder）」としたように本文三七〇行目でロードスという言葉が出てくるが、本詩には小アジアや島嶼部などの方言的特徴が見られ、必ずしもロードス島のみに関連する作品と言うことはできないだろう。

八　「優柔不断」という言葉が連続しているが、原文でも両方とも δίγνωμον であり、これを反映させるため訳文でも敢えて同じ単語を選択した。

九　κατάκλωστα κλωσμένα: 「κλώθω（紡ぐ）」とその中受動分詞 κλωσμένος に由来する畳語的な表現であり、これを反映させるため訳文でも敢えて同じ単語を選択した。

一〇　φλεί, φλεί με […]ανέσι ανέσι: 畳語的な表現であり、これを反映させるため訳文でも敢えて同じ単語を選択した。

一一　Αληθογρυσοστράγαλε: 古代ギリシアの神話に由来する可能性があり、金羊毛を示していると思われる。これは、ボイオティア地方の都市オルコメノスの王の妻であったネペレが、神託の犠牲として屠られそうになった子プリクソスを助けるため遣わした黄金の毛と翼を持つ羊の毛である。その後、コルキスに辿り着いたプリクソスが、現地の王アイエテスの娘と結婚する際に羊を犠牲に捧げ、金羊毛を王に贈った。そうしてコルキス王国の秘宝となった金羊毛をイアーソンが奪取して故郷に持ち帰るまでが『アルゴナウティカ』において語られる（アポロニオス・ロディオス著、堀川宏訳（二〇一九）、『アルゴナウティカ』、京都大学学術出版会、三六四–三六五頁）。

一二　αληθινοπετράνε: 古代ギリシアの神話に由来する可能性があり、青銅の巨人タロースの唯一の弱点であるかかと（の

くるぶし）を示していると思われる。タロースは、ゼウスがクレタ島にてエウローペーと子をなした後、彼女に与えた島の守護者にして青銅の巨人であるという伝承や、鍛冶神ヘファイストスによって造られてクレタ王ミノスに与えられたという伝承などが知られている(アポロニオス・ロディオス著、堀川宏訳（二〇一九）、『アルゴナウティカ』、京都大学学術出版会、三四九-三五二頁)。

一三 παγκρασίδωτη και παγκρασιδωμένη: παγκρασιώτη και παγκρασιδωμένη: ここの箇所は一九一三年のD. C. Hesselingと H. Pernotによる校訂版では πανκρασιώτη και πανκρασιδωμένη となっているが、「この二つの形態は私たちに知られていない（Les deux formes nous sont inconus）」と注が施されている。W. Wagnerの訳に基づいてPalumboという人物が「豪華に刺繍された（« richement brodé »）」と訳した例を紹介しており本稿でも参考にした（D. C. Hesseling et H. Pernot (1913), 38)。

一四 Τουρκόπουλον: キリスト教徒トルコ人傭兵（Τουρκόπουλοι）を指す。第一回十字軍の時期からビザンツ軍に組み込まれるようになり、後にトルコ人に限らず軽装騎兵全般を示すようになった。ロードスやキプロス、イェルサレムなどに築かれた十字軍国家においても同じような軽装騎兵が見られる（Kazhdan, A. (1991), *Oxford Dictionary of Byzantium*, Oxford, 2100)。

一五 κοντοστάβλη: 本来の語形は κοντόσταβ(υ)λος である。ここではκοντοστάβλης（コンドスタヴリス）の語形で用いられている。ビザンツ皇帝に仕えるフランク人（西欧人）傭兵集団の隊長を意味する。パレオロゴス朝期において高位の官職として重視された（尚樹啓太郎（二〇〇五）、『ビザンツ帝国の政治制度』、東海大学出版会、一一八頁)。

一六 四六〇行目から四六七行目は男性と女性のどちらが喋っているのか不明である。恐らく詩人の独白のように思われる。

一七 γενή：一九一三年のD. C. HesselingとH. Pernotによる校訂版では γενεί となっているが、いずれにせよ文法的には訳出できず、フランス語校訂版においても訳出されていない（D. C. Hesseling et H. Pernot (1913), 42-24)。

一八 訳文では少女が外国人であることを示していると思われる。

一九 έχεις χάριν: 「あなたは恵みを有している」と解釈できるが、ここでは詩文の意味を鑑み、訳文のように解釈した。なお、五〇五行目の「恵み」も την χάριν である。

二〇 χρυσόβουλλον: 金印勅書と訳される。ビザンツ帝国の宮廷で発給された黄金の印章が付属した皇帝文書である。皇帝自身が朱字で署名し、λόγος という単語を朱字で書き込むことで皇帝自身によって発給されたものであることを示す。一時期、皇帝が「Legimus（読んだ）」というラテン語を署名しているものも見られた。ここではその権威が、一度結ばれた

男女の関係の絶対性の比喩として使われていると思われる（Kazhdan, A. (1991), *Oxford Dictionary of Byzantium*, Oxford, 451-452）。

二二　ο βασιλεύς: 通例日本語で「王」とも訳しうる単語であるが、ビザンツ帝国の統治者を指すものとして「皇帝」と訳出するのが適当である。

二三　ο λογοθέτης: 再建音に基づきロゴテテスやロゴテテースとも転写しうるが、本翻訳が中世口語詩であることを鑑み、実際に発音されている発音に基づき転写している。この官職の起源は諸説あるが、七世紀以降のビザンツ帝国での官僚組織の発達過程で時代ごとに様々な機能を分化させていった。例えば税務に携わるロゴテティス・トゥ・ゲニクウ（λογοθέτης τοῦ γενικοῦ）、軍務に携わったロゴテティス・トゥ・ストラティオティクウ（λογοθέτης τοῦ στρατιωτικοῦ）、八世紀には通信や外交に携わり、その後も十二世紀まで職務を拡張させたロゴテティス・トゥ・ドロムウ（λογοθέτης τοῦ δρόμου）、遠征時に必要な馬や騾馬などを管理したロゴテティス・トン・アゲロン（λογοθέτης τῶν ἀγελῶν）、十一世紀の行政を一元的に管理したロゴテティス・トン・セクレトン（λογοθέτης τῶν σεκρετῶν）などが挙げられる。その後、ニケーア帝国時代を経てパレオロゴス朝期には、従来のロゴテティス系の官職の大半は爵位化して事実上何の機能も持たないか、下級役人を示すようになった。例外的にアンドロニコス二世治世下でメガス・ロゴテティス（μέγας λογοθέτης）が行政長官の機能を果たしたが、注一五で先述したコンドスタヴロスなどの新設・格上げされた官職に劣るようになった。ゆえに本詩が後期ビザンツに作られたことと「宮廷で裁く」という形容を考慮すれば、ここではメガス・ロゴテティスか下級役人としてのロゴテティスを示すと思われる（Kazhdan, A. (1991), *Oxford Dictionary of Byzantium*, Oxford, 1246-1249）。

二三　της δέσποινας εικόνισμαν: ここでは δέσποινα という単語は「生神女マリア（Θεοτόκος）」あるいは「至聖女（Παναγία）」を指し、ローマ・カトリック教会圏並びに一般に日本においては「聖母マリア」と呼称される。Δέσποινα は数ある生神女に対する敬称の一つである。聖像はイコン（η εικών）を指し、装飾品や美術品であるばかりでなく、奉神礼や信仰生活において種々の役割を有する聖具である。

二四　ここで「王」と訳出した単語は των ρηγώδων であり、ラテン語の rex やイタリア語 re などに由来する単語である。

二五　『旧約聖書』「創世記」より。

二六　… ουσουν: 校訂版には複合強勢記号が施されているため…οὐσουν と ου-が語頭となって始まる単語のように記載されているが、本文ではもとは-ουσουν で終わっている三人称複数形の動詞であったと解釈し、三人称複数主語の存在を示すために「人々は」と訳出した。

二七　ωνωτρωνίζεις: クレタ語の方言であり、イドメネオスの

辞書では ανεντρανίζω で登録されているが、その意味は「目線を上げる」、「力を得る」、「立ち上げる」などである (Ιδομένεος, M. (2006), *Κρητικό Γλωσσάριο*, Ηράκλειο Βικελαία δημοτική Βιβλιοθήκη, σ. 45)。

二八 καλέ: 直訳すると「よき人よ（男性）」であるが、日常的に親しい人に呼び掛ける時に用いる表現である。

二九 ここも καλέ である。

三〇 ここも καλέ である。

三一 επαράδειρα: επί と παρά と δείρω の複合動詞であり、δείρω は「δέρω（皮などを削ぐ、けずる）」の別形であろう。

三二 από λουτρού λουμένη: 畳語的な表現である。

三三 ビザンツ帝国では伝統的にローマ・カトリック教会圏を中心とした西欧全体に住む人々のことを「フランク人」や「ラテン人」というように総称していた。ゆえに、ここでは特定の国ではなく、西欧全般を曖昧に指すと思われる (Kazhdan, A. (1991), *Oxford Dictionary of Byzantium*, Oxford, 803-804)。

【謝辞】

本翻訳にあたって、訳文の確認と詩文作成において早稲田大学文学部西洋史コースの戸田翔氏の助力をいただいた。ここに感謝の意を表明する。